聖地のこどもニュース

オリーブの木

No.80
2021年5月

おそらく意味も分からずデモに参加する子どもたち。（ラマラ）
紛争地の子どもたちが、皆平和を理解し、平和のために働く人に育つことができるように！

支援者の皆様

イスラエルとパレスチナ（ハマス）の激しい攻防は5月21日朝、停戦合意にこぎつけ、ひとまずほっとしました。今までどれほど多くの命が犠牲になったことか！　その度に、愛する者を失くした人々、住まいや土地を奪われた人々の悲しみと敵意が募ります。今回はユダヤ人とイスラエル国籍アラブ人という市民レベルでの争いも激しかったので、とても心配でした。

幸い、当法人の「平和の架け橋プロジェクト」参加メンバーは、ガザの青年も含めて皆無事のようです。こんな時こそ彼らの心に蒔かれた「平和の種」が芽を出し、相手の痛みや苦しみを思いやり、身の回りの対立を静め、傷を癒やしてほしいと願います。

私たちは引き続き聖地の教育を支えていきながら、「コロナ禍」で中断を余儀なくされた青少年国際交流事業を、来春には再開することをめざしています。

すべては皆さまのご支援があればこそ。どうぞこれからもよろしくお願いいたします。

理事長　井上 弘子　スタッフ一同

2020年11月、引き続き認定NPOと認められました
認定NPO法人
聖地のこどもを支える会

これは、JANICの「アカウンタビリティ・セルフチェック　2012」マークです。JANICのアカウンタビリティ基準の4分野（組織運営・事業実施・会計・情報公開）について当団体が適切に自己審査したことを示しています。

事務局　〒164-0003 東京都中野区東中野 5-8-7-502　Email ispalejpn@gmail.com　TEL/FAX 03-6908-6571

ご支援は…　郵便振替 00180-4-88173　加入者名「NPO法人 聖地のこどもを支える会」

当法人へのご寄付は、税制優遇が受けられます。

https://seichi-no-kodomo.org

希望のしるし　エルサレムのコロナ重症患者センターで働いて

アブドゥルラーマン・バルフム

私は今20歳で、エルサレムの西7kmの「アイン・ラファ」に住んでいます。私の夢は、医療、公共衛生、あるいは看護関係の勉強をすることでした。今でもこの夢は変わっていません。

私が今誇りに思っていることは、この新型コロナウイルスのパンデミックの最中に、当時失業していたこともあって、エルサレムにあるイスラエル最大の総合病院「ハダサ病院」の求人に応募して採用され、コロナ重症者センターで働くことができたことです。働き始めて最初の2，3週間は、すべての人が、人種も肌の色も宗教も関係なく、この感染症の犠牲になり得るということを見て、私の心は動揺し、苦しみました。

私たちのチームには「エルサレム住民」のアラブ人、イスラエル国籍のアラブ人、ユダヤ人もいましたが、みんなで心を合わせ、力を合わせて協力し、患者ひとり一人尊厳ある人間として敬意をもって接するように努めました。目の前にいるこの瀕死の患者がアラブ人であってもユダヤ人であっても関係なく、なんとか命の危機から脱出し、もう一度生きる機会を与えられるように、というのが私たちの最大の目的だったからです。

実は私自身、大切な家族3人をコロナ感染症で亡くしました。発症した時3人は、この病院に入院してきたので、ある意味幸いなことに私も彼らの看病に加わることができました。しかし治療に全力を尽くしたにもかかわらず、残念ながら、この恐ろしい新型コロナウイルスに打ち勝つには手遅れでした。

イスラエルでは、昨年末にワクチン接種が始まって以来、感染率や重症者率が劇的に減少し、4月下旬には、私たちの病院がコロナ重症者センターとしては唯一の砦となりました。最後まで残っていた5人の患者はヨルダン川西岸地区から来た数人のパレスチナ人、彼らもまた他の人と同じように手厚い看護を受けて命を救われ、退院できました。

ハダサ総合病院の重症者病棟。医療従事者も患者もいなくなり無人となった。（エルサレム）

そして遂に今日2021年5月3日、命の危険がある重症者がいなくなったということで、この病棟は閉鎖されました。（写真参照）　こうして、数々の命を救えた喜び、そして救えなかった悔しさと悲しさ、体力や精神力の限界など、様々なことを体験した長いエピソードは終わりました。

後に残されたもの、それは、このパンデミックのおかげで心を一つに結ばれた友人たちです。そこにはアラブ人、ユダヤ人、パレスチナ人、キリスト教徒、イスラム教徒もいます。私たちはみんなで協力してこの脅威に立ち向かい、勝利したのです。

重症患者の治療チームの3人は良い友だちとなった：中央が筆者アブドゥルラーマン（イスラエル国籍アラブ人、キリスト教徒）。

私は世界で初めて国レベルで新型コロナウイルスに打ち勝ったイスラエルに住んでいることを幸運に思います。皆さまがニュースでご存じのように、私たちはゆっくりと、しかし確実に通常の生活に戻りつつあります。

私は、コロナウイルスとまだ戦っている日本のため、他の世界の国々のために、できるだけ早くイスラエルのように通常の生活に戻れるように祈っています。

最後に一言、私たちは、このパンデミックの間に、どんな人でも、一つの民、一つの国として、すべての人の善のために一致して働けることを経験しました。私の希望はこれから日常生活にもどっても、そのようにみんなで心を合わせて生きていくことです。

どうぞ私たちのことを忘れないで祈ってください。私たちも皆さまのために祈ります。

エルサレムに住んで変わったイスラエルとパレスチナの見方

内藤徹（清泉女子大学講師、元JICA職員）

僕は、同じJICAに勤める妻のパレスチナ事務所への転勤を機に早期退職をして、2人の子どもも一緒にエルサレムに行きました。2018年8月から1年7か月住み、主夫をしながら、NGOでボランティアをしたり、日本から来る知人や教育関係者からの依頼でエルサレム周辺を案内したりしていました。僕が住んでいたのは西エルサレムで、エルサレムの中でもイスラエル側です。歩いて10分もすると、パレスチナ人が住む東エルサレムとの境の道路があります。着いたばかりの頃は、東エルサレムに行くのにも、検問を通って壁の向こうに行くものと思っていたら、何の境界もなくするっと行けて拍子抜けしました。それが、東エルサレムはパレスチナ人の住む地域であるにも関わらず、イスラエルが一方的に占領しているからだと後から理解しました。

イスラエルとパレスチナに関しては、不思議なことだらけでした。東エルサレムにいるパレスチナ人の多くは、イスラエル国の行政地域に入りながら、イスラエル国籍も取っておらず、国政の選挙権もないと聞きました。エルサレムの西と東は境界もなく誰もが行き来できるけど、東に住むパレスチナ人は西側に行きたがらないし、西側に住むイスラエル人も東に行きたがりません。5月のイスラエルの建国記念日は、西側ではイスラエルの国旗を飾り、花火をあげてお祭り騒ぎをします。しかし、通りを挟んだ東側にとっては、ナクバの日と呼ばれるパレスチナ難民が発生した悲しい出来事を記憶する日です。かといって、お互い普段から争っている訳でもなく共存しています。トラム(路面電車)は西と東をつなぐように走っています。そして、イスラエルの中にも、実はパレスチナ人が2割ほどいて、イスラエルの各地にアラブ人が多く住む町があることも、僕にとっては意外でした。

エルサレムに住んでいてパレスチナの話題をすると、立場によって反応が異なるので気を使います。タクシードライバーから「なんでエルサレムに住んでいるんだ」と聞かれ、「妻がパレスチナの支援をしているから」と答えると、アラブ人は喜んで親密に話してくれますが、ユダヤ人だと怪訝そうにしたり、明らかに不機嫌になられたりもします。

イスラエル国による占領や、いまだに続く入植行為は問題ですが、僕が西側で暮らしていて出会うユダヤ人は決して悪い人でもない。そこに何か違和感をもち、国と個人の考えは別だと思いながら過ごしていました。ユダヤ人はパレスチナについてどう考えているか聞きたいと思っていたところ、イスラエル人と結婚しつつ、日本のパレスチナ支援の仕事にも長くかかわっていて、両者の視点を持つ日本人と知り合うことができました。詳しく話を聞いてみると、イスラエル側には違った視点と考えがありました。僕が考えさせられたのは、例えばこんな言葉です。

「そもそもこの地に戻って来るときに、ユダヤ人は当時統治をしていたイギリスに了解を得てやってきた。」

「1948年の建国の時だって、イスラエルは国連の決めた境界線を承諾したが、戦争を仕掛けてきたのはアラブ側だった。」

「これまでアラブとの戦争を、強い軍事力で守り抜いてきた。ホロコーストから学んだことは、自分たちのことは自分たちで守るしかないということ。」

「ユダヤ人は、これまで世界中から迫害され、嫌われてきた。イスラエルは唯一差別をされずにユダヤ人が住める国。望んでいることは、この地に平和が訪れ、安住できること。」

「我々の一番の脅威はイラン。そして、いつこの地から追い出されるか不安でいる。だから、周辺国と和平合意を結んでいる。力で来れば力で守るしかないが、我々が望んでいるのは和平。」

「徴兵に子供を送る親の思いは複雑。徴兵がない平和な世界が良いに決まっている。」

全てに納得するわけではないにしても、イスラエルの人の思いが分かるところもあります。今も続く入植行為は許せませんが、「どちらが正しくて、どちらが悪い」でなく、「ここは、あっちが悪いが、ここはこっちも悪い」、という風に理解すべきだと思うようになりました。さらに言えば、それも、「よそ者の日本人である私の意見では」という条件付きの話じゃないかと思いました。そして、お互いの思いを知る機会があまりに少ないことが分断を作り、増幅させるんじゃないかとも思いました。

エルサレムに住んでいる日本人ですら、パレスチナ支援などをしている人と、イスラエル人と結婚した

りユダヤ教を学んでいる人とでは、話をする機会が少ないことにも気づきました。まずは日本人がお互いを知り合う場を作ろうと思い、「エルサレムで学び会う場」という勉強＆交流会を2020年の2月から始めました。中東地域の歴史や今、それぞれの立場の考えなどの話を聞き、グループで意見交換をするような場です。2回目からはzoomを使い、これまで8回やり、イスラエル、パレスチナに住んでいる人、住んでいた人が毎回20〜30人ぐらい参加しています。安心、安全な場所としてお互いが話しやすいコミュニティとなり、具体的な対話が今後進められたらと考えています。

聖地のこどもを支える会について

そもそも相互理解を活動の中心に据えている日本のNGOはほぼなく、その継続がすごいと思っています。そして、スタディツアーのプログラムを見て、パレスチナ側の視点のみでなく、イスラエル側についても理解をしたうえで、参加者が自ら考えるようにしている点に共感しました。代表の井上さんと会って話をしたときに、「だって、お互い人間だから、人間として理解しあわないと」みたいなことを言われていたのがとても印象的でした。僕も両者、それぞれの目線を大切にすべきだと思っています。

今はコロナで海外の行き来が難しくなり、主要事業である日本人の現地スタディツアーや日本へ招いての「平和の架け橋プロジェクト」ができなくなり、大変な時期だと思います。しかし、僕はこの団体には大きな宝が2つあると思っていて、ぜひそんな宝を活かしてほしいと思っています。

一つは、これまでの対話の歴史があり、それを経験したイスラエル、パレスチナの人たち、そしてそこに関わる日本人がたくさんいるということです。きっと、彼ら彼女らの中に何か大事な種が残り、それがいつかどこかで芽を出しているだろうと思います。また団体の呼びかけがあれば、活動の力になってくれる気持ちがある人達じゃないかと想像しています。

もう一つは、これまでの対話の経験から体得したノウハウや、対話の中で起きた出来事の実績です。イスラエルとパレスチナの対話は、お互いの利害がせめぎ合い、アイデンティティや、過去の出来事から、感情的になったり、相容れない話になったりすることが容易に想像できます。それを、何に配慮をしてプログラムを組み、どのように対話のステップを踏み、話し合いの中でどのようにファシリテーションして対話の成果を生み出して来たのか、そこにはとても多くの知恵や工夫や思いやりがあると思います。そして、対立と分断の今の世の中にとって、貴重な宝が眠っているように思います。

是非、そのようなお宝を活かし、世の中に伝えていくようなことも大事にしてほしいと期待します。そして、そのような対話ができる人材を育てることもできれば、素敵なことだと思います。これからも応援したいと思います。

<おまけ>

エルサレムでの日々を記した電子書籍「仕事を辞めてエルサレムで主夫してきた」を出版しました。イスラエルとパレスチナに関する対話も詳しく掲載しています。ぜひご一読ください。

（Amazonで検索すれば出ています。300円です。）

認定NPO法人聖地のこどもを支える会の

会員になりませんか?

さまざまなプロジェクトをはじめ、当会の活動・運営を総合的に支えていただく会員制度。あなたのご意見が、平和のつくり手を育てます。事務局までお気軽にお申し出ください。

正会員	個人	年額 12,000円／1口
	学生	年額 6,000円／1口
賛助会員		年額 6,000円／1口

正会員は、当法人の総会等での議決権を行使することができます。

支援金の自動払込みサービス

ご好評を頂いている自動払込みサービス。まだの方はぜひご利用ください。

＊ 郵便振替、クレジットカード、どちらでも可能です。
＊ 銀行や郵便局へ、毎回払込みに行く手間が省けます。
＊ いつからでも、いくらからでも 簡単に始められます!

お申込み・お問合せは
当法人事務局 03-6908-6571
または 042-636-9218（中山）

「共感」を持つと……

田川奈美（日本のNPO職員として、パレスチナ問題に関わる）

皆さま、初めまして！田川奈美と申します。

2020年1月にエルサレムで井上理事長とお会いする機会があり、そのご縁で今回オリーブの木に寄稿させて頂くことになりました。まずは、私とイスラエル・パレスチナとの関わりについて、簡単に説明させて頂きます。

大学でイスラエル・パレスチナ問題を知った私は、2003年春、ヨルダンのパレスチナ難民キャンプを訪問。2009～2013年、イスラエル・パレスチナにて「紛争に関する対話」のワークショップに参加しインターンも体験、そして2017～2019年、あるNPOの仕事でパレスチナに駐在、最後の一年は中期出張、という形でこの問題と関わってきました。

今回の寄稿にあたり改めて思ったのは、この問題について語ろうとするといつも、ためらいを感じるということです。イスラエルかパレスチナか、どちら側に立つのかを常に問われるようで、どちら側でもない立ち位置をうまく確保できずに、足元がぐらぐらする感覚に陥ります。

日本では「どちら側でもない」というと、「中立」として肯定的に捉えられることが多いと思いますが、イスラエル・パレスチナでは必然的に「あちら（敵）側」とみなされてしまう体験を沢山しました。また、「対話」や「和平」といった言葉も否定的に捉えられ、「まやかしの正常化」や「商機に利用するもの」として批判の対象にすらなることも目の当たりにしてきました。ですから、この問題について語ろうとする度、何をどう話しても結局、「イスラエル対パレスチナ」という対立構造の維持に寄与して終わるのではないかと怖くなってしまうのです。

他方、私にとってこの問題は、様々な「問い」を投げかけてくるものであり、それらの「問い」を通して私自身や社会の在り方を問い直すことが大切だと私は考えています。そこで、これまでの体験を通して得てきた「問い」の一つをご紹介させてください。

その問いとは「私は対立関係の中にあってなお、相手への『共感』を持つことができるだろうか？」というものです。きっかけは、「紛争に関する対話」のワークショップで、あるパレスチナ人男性から聞いた体験談でした。以前はイスラエルに対する投石活動を行ない、投獄経験もあるという彼は、投石活動がパレスチナに自由をもたらすと信じていたけれど、ある出来事がその考えを変えたとのこと。以下彼の話をまとめてみます。

「ある雨の日、夜道を車で走っていると、検問所に出くわしました。いつものようにイスラエル兵によるチェックを受けていたところ、若い兵士が銃を私の頭に押し付けながら『気分はどうだ？』と聞いてきたのです。私は『とても哀れだ』と答えました。『君ぐらいの年齢なら、夜は友達と出かけて楽しく過ごしたいだろうに、こんな肌寒い雨の夜に、周りに何もない検問所に立って、見知らぬ誰かの頭に銃を突きつけなければならない。そんな日常を過ごさなければならない君のことがとても哀れで気の毒だ』と。その時本当にそう感じたんです。すると、その兵士は驚いた顔をしたまま暫く固まって、それから静かに涙を流し始め、私にこう言いました。『自分の気持ちを分かってくれた人は初めてだ』と。これをきっかけに、私は投石活動を止め、平和活動を始めました。」

それはとても心を揺さぶられる話でした。頭に銃を突きつけられてなお、相手に「共感」を抱くことは、私には到底できそうにありません。日常生活の些細な対立の中ですら、相手を批判し、自分の正当化に終始してばかりが、悲しいかな、私の現実です。しかし、「人はありのままの自分が受け入れられたときに、初めて変わることができるのだ」という心理学者ロジャースの言葉の通り、この話もまた、対立を変容させる最も根本的で確実な方法を示してくれているように思います。

ニュースを見ながら日本の政治に絶望感を覚える時、対立や分断が進む社会問題を前に「あり得ない」と断罪する時、家族や友人・同僚と意見が食い違う時、まだまだ、何故相手は分からないのか、変わらないのかと憤るばかりですが、「共感」を持つとどう見え方が変わるのか、自分に問いかける時を一瞬でも持てるよう、あのパレスチナ人の話を常に心に留めて置きたいと思っています。

イスラエルのアラブ政党、初の政権参加が見えたが…

村上 宏一（当法人理事・元朝日新聞中東アフリカ総局長）

イスラエルでは、2年間で4回目の国会議員選挙の投票がこの3月にありましたが、これまでと同様、連立政権をつくる交渉が難航しています。どの政党の組み合わせも、国会（120議席）で過半数を制することができないからです。そんな混乱の中で、1948年のイスラエル建国以来、政権に参加したことのなかったアラブ政党の入閣が語られるようになってきました。イスラエル・パレスチナの衝突再燃で、その可能性はなくなったと思われますが、アラブ政党の存在感が強まってきたのは確かです。

ユダヤ人国家の異分子扱い

迫害の歴史を生きてきたユダヤ人が安全に暮らせる「ホームランド」とうたわれてつくられたイスラエル。ところが、第1次中東戦争で勝ち取った領土内には、元々住んでいたアラブ住民の多くが残りました。「ユダヤ人国家」を標榜したいイスラエルのユダヤ人にとっては悩ましい存在です。追い出すことはできず、同じイスラエル国民としての市民権を与えないと、かつての南アフリカ共和国のような人種差別国家と呼ばれる。かといって、共に国家を運営していくほど信用することができず、アラブ市民を代表する政党には連立相手としての正当性を認めずにきたのです。そしてアラブの側も、ユダヤ人主体の国家に背を向ける感じで、国会に送り込んだ代表が政府に影響を与えるよう働きかける意識が薄かったといえます。

結果として、政策のうえでアラブ系市民の優先順位は低くなり、例えば政府が予算面で差別することはないと言っても、住環境整備などの面でアラブ人居住地域は遅れがちです。

過半数を目指して仲間探し

このような政治状況に変化をもたらしつつあるのが、国会の過半数を制する連立政権をつくりにくくしている票の分散です。比例代表制のイスラエルの選挙では、単独で国会議席（120）の過半数を得た政党はありません。1949年の第1回選挙の時から92年までは得票率1%を超えれば当選できたため、国会議員1人だけの党も存在するほどで、票の分散は避けられませんでした。この数字は徐々に引き上げられ、現在は得票率3.25%未満の政党には議席が配分されないようになりました。しかし、それでも国会に議席を持つ政党は、今回の選挙後も13党あり、第1党のリクードはやっと30議席です。

今回、リブリン大統領は、第1党の党首であるネタニヤフ氏に組閣を指示しました。しかし、リクードを中心に宗教政党シャス（9議席）・ユダヤ教連合（7議席）と、人種差別的傾向を持つ極右政党「宗教的シオニスト」（6議席）を合わせた右派・宗教陣営は合わせて52議席。首相続投を狙うネタニヤフ氏にとって、国会で過半数を制する連立政権をつくるには、9議席足りません。かつては与党にいながら、党首がネタニヤフ氏と不仲になって離れた「右派連合」（7議席）に、仲間に戻れと秋波を送っていますが、たとえ加わってもなお、過半数に届かない状況です。

これに対し、第2党の中道政党イェシュ・アティッド（17議席）のラピッド党首は、中道・左派の青と白（8議席）、労働党（7議席）、メレツ（6議席）に右派のイスラエル我が家（7議席）を加えた5会派から首相候補として推薦されました。議席数の合計は45だったので、大統領は推薦がより多かったネタニヤフ氏に、まず組閣を指示したわけです。

ラピッド氏は、右派政党の「新たな希望」（6議席）と、前述の通りネタニヤフ陣営からも誘われている「右派連合」（7議席）も取り込むことを目論んでいる、と伝えられています。右か左かを問わない「反ネタニヤフ陣営」ともいえる連合体ですが、それでも合計議席数は58で、やはり過半数には届きません。そこで注目されるのがアラブ票です。

4議席でも連立のカギ握る

昨年（2020年）3月の選挙でアラブ政党は統一会派として臨み、15議席を獲得しました。今回はイスラム教色とイスラエル市民としての権利拡大を強調する「アラブ連合」が会派を離れて単独で臨み、4議席を得ました。母体だった「アラブ統一会派」は6議席でした。合計議席数は後退したのですが、ネタニヤフ・反ネタニヤフどちらの陣営にとっても、アラブ政党が支持してくれるかどうかが重要な要素になってきたのです。

投票するマンスール・アッバス氏＝アルジャジーラ電子版より

特にアラブ連合は、党首のマンスール·アッバス氏が選挙前に「アラブは自動的に左派と見なされてきたが、左か右かの問題ではなくアラブ住民の利益を考えて行動すべきだ」と発言したことが伝えられていたため、両陣営から支持を期待される存在となったようです。ネタニヤフ陣営は右派連合を取り込んだうえでアラブ連合の支持を得れば、合計63議席となります。反ネタニヤフ陣営は右派連合、新たな希望の右派2政党を加えた58議席に、アラブ政党の支持を期待しています。アラブ票が、それもわずか4議席の政党さえ、連立の成否に関与できる可能性が出てきたのです。

このように、小政党が連立政権の命運を握る状況は、既に前例があります。1949年3月に成立したイスラエル最初の内閣は、労働党の前身マパイという政党を軸にした連立政権でしたが、政見を同じくする他党と合わせた議席は57で、安定した過半数を得るには宗教政党の16議席を必要としました。宗教政党の入閣はずうっと今日まで続き、内閣存続のカギを握る強みを生かして、宗教的な要求を通しています。ユダヤ教の安息日であるシャバット（土曜日）には商業活動も公共交通機関も停止、などが法制化されました。また、子どもの多い家庭への手厚い保護もその一つとされます。旧約聖書にある「産めよ、増えよ」という教えのため、宗教に厳格な人々＝宗教政党の支持者ほど子だくさんである傾向があり、この政策の恩恵にあずかれるというのです。

「人種対立」を超えられるか

2018年7月、イスラエルを「ユダヤ民族国家」と定義付ける法案が国会を通過しました。人口の約5分の1を占めるアラブ系市民を抱えながら、ユダヤ人の国家であることを明言し、さらに同等の公用語とされてきたヘブライ語とアラビア語のうち、ヘブライ語のみを公用語と位置付けるものです。建国宣言ではイスラエルを「ユダヤ人のホームランド」とする一方で「民主主義国家」であるとし、アラブ系住民にも平等の権利を保証すると明言しています。それに対してユダヤ民族国家法は、ユダヤ人の優位を強化しアラブ人に対する差別を正当化するものだとして、アラブ人のみならずユダヤ人の中からも批判の声があがりました。

この法案通過を、当時も首相だったネタニヤフ氏は「ユダヤ人国家の創設原理を定義づけた」という表現で称賛しています。ところが今回の選挙に際しては、連立交渉の混沌を見越してか、最近のアラブ諸国との国交正常化をアピールして、アラブ人有権者の歓心を買おうとしたと伝えられています。一方、ユダヤ人の間にもアラブ政党の政権参加を受け入れる機運が出てきているとの調査結果が報じられています。イスラエル民主主義研究所というシンクタンクによると、左派系の人々の80%がアラブ政党の参加を支持しており、中道系だと、この1年で支持が38%から55%に増え、右派系でさえ10%から34%に増えたと報告しています。

ただ、右派の間にある反アラブ感情は根強く、ネタニヤフ陣営の極右政党「宗教シオニスト」の党首は、アラブ連合のアッバス党首を「テロ支持者」と決めつけ、「彼を入閣させればアラブ政党（の主張）を正当化することになる」として反対しています。反ネタニヤフ陣営でも、イスラエル我が家や右派連合などの右派政党はアラブ政党との連立に積極的とはいえません。

さらに、4月下旬に始まったイスラム教の断食月「ラマダン」を機に、イスラエル警察がエルサレム旧市街の一部をパレスチナ人立ち入り禁止にしたのがきっかけで衝突が起き、イスラエル軍がガザ地区を空爆、ガザからはロケット弾がイスラエル側に打ち込まれるなどしたため、対アラブ感情がまた悪化しました。これで、アラブ政党の入閣を語る空気は吹っ飛んでしまいました。とはいえ、各党の勢力の均衡が続く限り、アラブ政党の存在感が弱まることはないでしょう。

他者の声に、真摯に耳を傾けよう

石黒 朝香（エルサレム在住・外務省職員）

5月10日から再燃した武力の応酬は幸いにも21日、なんとか停戦が実現しましたが、和平への道はなお予断を許しません。深刻なのは、一般市民の間でも猜疑心や恐怖がもたらす争いが多発していることです。平和を語り合うはずの当法人のSNSでも、しばしば敵対的な意見が飛び交います。

そんな中、2005年からプロジェクトに参加、スタッフとしても働いた石黒朝香が勇気をもってあげた声を紹介します。彼女はユダヤ人と結婚し、国連職員として、いま外務省職員として、パレスチナ人のために働いています。

イスラエル・パレスチナにいる「平和の架け橋プロジェクト」参加者の皆さん、無事にお過ごしでしょうか？　私はエルサレムに住んでいるので、ガザの人々、アシュケロンやアシュドッド、テルアビブの人々より安全な地域にいます。しかし多くの友人や元同僚はきっと、イスラエル軍の空爆や砲撃、またガザからの反撃ミサイルの轟音や、鳴り止まないサイレンの音に怯えていることでしょう。

実は私も不安な気持を拭いきれません。ユダヤ人である夫がペタハ・ティクヴァ（テルアビブ東側の街）に通勤しているからです。つい先程仕事場の近くにミサイルが落ちたとか。幸い彼は無事でしたが。

愛する人を亡くした悲しみは当事者しか理解できないでしょう。それでもアシュケロンで5歳の子供が、またガザで妊娠中の母親が犠牲となったことを耳にすれば、攻撃がどれほど正当化されようとも、心はとても痛みます。

私たちは今、とても大変な、そして重要な時期にいると思います。それは状況が日々悪化する中、私たち全員がストレスや不安を抱え、大きな憤りを感じているからです。しかし皆さん、この「平和の架け橋プロジェクト」グループは平和構築を信じる者の集まりであることを思い出しましょう。プロジェクトの中で、私たちは常に「相手」を理解しようと努めることが大切だと学びました。

このフェイスブックのグループがすべての人にとって安全な場所であるように、そしてこのユニークなコミュニティを維持するために、大切だと思うことをいくつか書きたいと思います。

まず、最近アップロードされた投稿やコメントを読む側の人たちへ。このグループでは、読者への尊重が払われる限り、誰もが自分の思うことをこのグループに投稿し、自らの考えを表現する権利があります。中には自分の意見と合わない考えもあるでしょう。しかし他者の声に真摯に耳を傾けること、それは、どんなに苦痛であっても、平和を実現するためには必要不可欠なことです。

ネタニヤフ首相に抗議するユダヤ人のデモ（エルサレム）

防空壕で、ロケット弾の轟音とけたたましい警報に怯える人々（テルアビブ）＊イスラエルでは、すべての建物に防空壕がある。

メッカに次ぐ神聖な場所ハラム・アッシャリフで、イスラエル治安部隊との衝突（エルサレム）

それから、投稿やコメントをする側の人たちへ。あなたの投稿を読む人たちは、恐らくあなたの想像を遥に超えた苦痛や不安を抱えているかも知れないことを思い出してください。もちろん言論の自由はありますが、また、メディアや第三者からのリンク、写真、引用を投稿するときは、ただ共有するだけでなく、あなた自身の考えやメッセージを加えることをお勧めします。

これ以上犠牲者が出ないように、悲しみと憎しみが増えないように、紛争が一日も早く終息するように、そして、私たち全員が笑顔と涙を分かち合いながら、すぐに直接会えるように、心から願っています。

写真撮影　ダリーヌ・ラマ、ヤクーブ・ガザウィ、アブドゥルラーマン・バルフム
ほかイスラエル、パレスチナの各種メディアより転載